

「豊太郎がエリスを捨てざるを得なかった」という
ストーリーについて

一 はじめに

〈テーマ設定の理由〉

エリスはこの「舞姫」の重要人物であり、そしてまた、主人公である豊太郎が深く愛した人物であった。そのような人物を、豊太郎が捨てざるを得なくなった結果、捨ててしまうというストーリーには、もつと別の意味も隠されているのではないかと思ったから。

〈テーマの結論〉

「豊太郎がエリスを捨てざるを得なかった」というストーリーは、同時に豊太郎が「自由に生きようとしていた豊太郎自身」を捨てざるを得なかったということを示している。

二 本論

（ア）豊太郎の生活の変化から見て

豊太郎はドイツに来て三年ほど経ったところに、大学の自由な雰囲気の影響を受けて、それまでの自分が「ただ所動的、器械的な人物」であったことを悟るとともに、「独立の志」を抱くようになる。そうして彼はそれまでとは違い、官長への手紙にいい加減な返事をしたり、大学の法科の講義をよそにして、歴史や文学に心を寄せるようになっていった変化を見せ始めるが、彼に「免職」という最大の出来事が起こり、そこから生活が大きく変化していくのは、エリスと出会ってから後のことであり、また、エリスこそがその原因である。

そして豊太郎は、自分が再び器械的な人物になりかけていることに気付いた後、エリスを選んで自由な生活が続けるか、職や名誉を選んで器械的な人物に戻るかを決めかねていた。しかし、相沢によつてエリスを狂わされてしまったため、結局豊太郎は、エリスを捨てて大臣の誘いに応じて帰国すること、つまり再び器械的な人物に戻ることを選ばざるを得なくなった。そのため、自由に生きようとしていた豊太郎が再び器械的な人物となったのは、エリスを捨てたその瞬間であると言える。

このことからエリスは、豊太郎が、器械的な人物ではなくならう、自由に生きようとしていた期間を象徴する人物であると言える。その

ような「象徴」であるエリスを捨てざるを得なかったということは、同時に、豊太郎が「自由に生きようとしていた自分自身」を捨てざるを得なかったということも示しているのである。

（イ）豊太郎の気持ちの変化から見て

自我の芽生えた豊太郎は、「また器械的人物とはならじ」と誓っていたが、気付いた時には、彼は大臣や相沢に同行していて、再び器械的な人物になりかけていた。それからの豊太郎は、エリスを選んで自由な生活が続けるか、職や名誉を選んで器械的な人物に戻るかを決めかねていたが、結局は相沢の行動によって、エリスを捨てること、つまり器械的な人物に戻ることを選ぶことになった。

そのような心の変化を見せた自分を、豊太郎自身は「変わりやすい」と思っている。このように、豊太郎が自分を「変わりやすい」と認めていることから、豊太郎が、再び器械的な人物となることを素直に受け入れて、自由に生きようという考えはあきらめた、ということが読み取れる。

よって豊太郎は、エリスとともに、「自由に生きよう」という思いまでも捨ててしまうことになったのである。

三 結論

以上のことより、「豊太郎がエリスを捨てざるを得なかった」というストーリーは、同時に豊太郎が「自由に生きようとしていた自分自身を捨てざるを得なかった」ということを示している。